

[書評論文]

Klus von Heusinger and Ken Turner (eds.)  
*Where Semantics Meets Pragmatics*

Amsterdam: Elsevier ltd. pp.XIII +534.ISBN-13; 978-0-08-044976-0

濱本秀樹

1. はじめに

本書は、いわゆる「意味論と語用論との境界」を主題にした論文集である。収録論文は19編にのぼる。編者2人による導入論文のあと、6つのサブテーマの下に2-5論文を配置している。構成は以下の通りである(説明の都合上、サブテーマ、論文にそれぞれ通し番号をつけている)。

- ① Introduction (Klaus von Heusinger and Ken Turner)
- I. Semantics-Pragmatics Interface
  - ② The boarder wars: A neo-Gricean perspective (Laurence R. Horn)
  - ③ A 'just that' lexical meaning for *most* (Mira Ariel)
- II. Pragmatics and Nominal Reference
  - ④ How to deny a presupposition (Ariel Cohen)
  - ⑤ Type shifting of entities in discourse (Michael Hegarty)
  - ⑥ The hidden path of semantic content within pragmatic context: A frequency study of the definite article *the* (Ring Mei-Han Low)
  - ⑦ Referential expressions and syntax-semantics (-pragmatics) interface (Mayumi Masuko)
- III. Bare Nouns and Generics
  - ⑧ General number and the semantics and pragmatics of indefinite bare nouns in Mandarin Chinese (Hotze Rullmann and Aili You)
  - ⑨ Tolerating exceptions with 'descriptive' and 'in virtue of generics: Two types of modality and reduced vagueness (Yael Greenberg)
- IV. Context and Quantification

- ⑩ Binding symmetries and nominal dualities (António Branco)
- ⑪ Superlative quantifiers and the dynamics of context dependence (Javier Gutiérrez-Rexach)
- ⑫ Information dependency in quantificational subordination (Linton Wang, Eric McCready and Nicholas Asher)

#### V. Information Structure and Underspecification

- ⑬ Semantic underspecification and the interpretation of copular clauses in English (Ronnie Cann)
- ⑭ Mapping VPs to restrictors: Anti-Diesing effects in Mandarin Chinese (Daniel Hole)
- ⑮ Contrastive topic/focus and polarity in discourse (Chungmin Lee)
- ⑯ Implicating and focusing on lexically underspecified information (Luis Paris)

#### VI. Mood and Intensionality

- ⑰ Mood, propositional attitude and metarepresentation in Spanish (Aoife Ahern)
- ⑱ Futurity in default semantics (Katarzyna M. Jaszczolt)
- ⑲ Temporal reference inside and outside propositional attitudes (Hans Kamp)

「意味論と語用論の可能な住み分け、分業、あるいは紛争」に関する問題は、最近とみに活発に議論されているが、多くの研究者の議論が錯綜しており、どこまでが本質的議論か、あるいは単なる用語の違いなのか分かりにくく、全体の見通しが悪くなっている現状がある。本書の第一の意義は、この「意味論と語用論の境界問題」に対し、基本的議論を提供することにより「鳥瞰図」を与えることである。第二に、多様な言語現象での、この問題の広がりや深さを示すことである。

## 2. 各論文の概観

①と、サブテーマ I の二論文②③は、本書の導入部にあたるもので、後の議論を理解するための整理であり、基本的な考え方、概念、問題のありかが説明される。②は Laurence Horn の意味論—語用論の境界をめぐる新グライス派的な見解が集約的に述べられている。③は Mira Ariel の尺度述語 ‘most’ をめぐる見解であり、“not all” という上限設定的読みを implicature として計算するのではなく、意味に組み込まれた default 解釈であるとする。④の Ariel Cohen の論文は“The King of France…” というよく知られた文の前提否定に関して、その否定の曖昧性を意味論的あるいは語用論的とみるべきかという議論を展開している。⑤の Michael Hegarty は、先行する命題を受ける指示代名詞と人称代名詞の交代現象を DRT で説明しようとするものである。⑥の Ring Mei-Han Low の論文は定冠詞 the の出現頻度についての論考であり、一般の予想に反して、非照応的 (non-anaphoric, antecedent-less) な

the が高い比率を占めることが示されている。⑦において Mayumi Masuko は、日本語の「自分」について context logic によって解釈可能であることを興味深く述べている。⑧の Hotze Rullmann らの論文は、中国語の不定的 bare noun の語用論・意味論的振る舞いについて説明するものである。⑨において Yael Greenberg は不定単数表現と総称表現の例外性を容認する程度に関する問題を指摘している。⑩で Antonio Branco は反対対当の四角形をとりあげ、束縛の現象はこのフレームで的確に捉えられることを主張する。⑪の Javier Guntierrez-Rexach の見解によれば、形容詞の最上級の解釈が文脈に依存することは DRT の枠組みでうまく捉えられると主張する。⑫の Linton Wang の論文は Every hunter who saw a deer shot it. \*It was a female/ It died immediately のような、文を越えた量化表現による代名詞の束縛関係を多くのデータを示し、形式的に論じたもので興味深い。さらに⑬-⑯では、本書の基本的な問題提起である「発話の（命題としての）不完全性とその解釈」をとりあげ、掘り下げた議論を展開している。⑬は、Ronnie Cann が Copular 文の解釈における意味的未決定性を Dynamic Syntax の枠組みで議論したもので、語用論的、統語的な相互作用が発話文脈での解釈内容を決定することが示されている。⑭の Daniel Hole では、中国語の構文の一部は Diesing の一般化（VP の内容が核文のスコープに投射される）に反し、VP は制限スコープに投射されるように解釈されることを述べたものである。⑮の Chungmin Lee は、contrastive topic/focus と、談話での極性現象の発現と停止の関係を議論している。⑯で Luis Paris は、英語では明示的に語彙として表現される移動動詞の様態は、スペイン語では語用論的に推意（implicature）として伝達されることを中心に述べている。⑰は Aoife Ahern によるスペイン語の subjunctive を関連性理論の枠組みで再解釈したものである。⑱の Katarzyna M. Jaszczolt の論文は、英語の “will” の機能である、(i) 時制、(ii) モダリティ、(iii) 両者に曖昧のうち「未来」の読みを、著者の提唱する default semantics の枠組みで説明しようとするものである。この枠組みも DRT 理論に基づく。最後にくる Hans Kamp の論文⑲は、拡張的な DRT 理論を展開し、異なる時間において、同一の agent に生じる attitudinal change（心的態度の変化）を含む2つの文（mini-discourse）の解釈を説明している。

(a) On Sunday Bill heard that Mary was in Paris.

(b) On Tuesday he learned that on the previous day she had left.

という mini-discourse において、(b)文の補部の解釈は(a)文の解釈を文脈情報として利用しなければならない。ここで(b)文を解釈するに必要な saturation（飽和）が DRT により説明できることが説明される。

以上が本書の概要であるが、そのすべてについて詳しく取り上げることはできない。次章では評者が本書で特に重要であると考えた問題を、紙面の許す範囲で議論することにする。

### 3. 議論

#### 3.1. いわゆる“Pragmatic intrusion into what is said”について

古典的 Grice 理論では、what is said (字義通りの意味) が語用論の入力となり推意 (implicature) を生成し、発話の意味が構成されるとしていた。しかし、近年、what is said の構築についても、文脈に依存するなんらかの推論が関与することが議論されている。例えば、“John’s car”という表現一つとってみても John で示される対象と car との関係 R の存在が意味的には示されるだけで、変項 R の値は文脈で決定されなければならない。本書には、いわゆる意味論の領域と従来考えられてきた範囲への語用論的処理の必要性 (pragmatic intrusion) をめぐる論争の主役たち、すなわち Sperber & Wilson, Carston, Recanati, Levinson らの論文は含まれていない。しかし、①、②論文が直接、この論争を解説してくれる。編者による Introduction では、このような what is said の構築について Levinson の Generalized Conversational Implicature 理論 (以下、TGCI) への支持が表明される。よく知られているように、関連性理論 (Sperber & Wilson 1995) では“what is said”という概念は廃され、発話の不完全な論理形式は表意 (explicature) として完全な命題内容に構成されるとする。この表意の推論過程は推意と同一のものと考えられている。Carston (2002) ではさらに、表意と推意は一方向性の処理過程ではなく、遡行的、逆行的推論 (backwards inference) も含まれることが示唆されている。編者たちは、関連性理論で前提とされる演繹的推論が、不完全な命題から完全な命題を構築する表意の表出には使えないのではと疑問を呈し、さらに「逆方向の推論」の設定についても反対している。Recanati (2002, 2004) では、関連性理論とは違い、命題の回復過程では「二つの判断 (judgement) の間の推論」という狭い意味での推論ではなく、“primary pragmatic process”と名づけられた無意識下で働く直感的な心的作用を想定している。これについても、編者らはその定義の不十分さを指摘し、結局、Levinson の TGCI を明確な説明性を持つとして支持している。しかし、②の論文において、著者の Horn は (彼は Levinson に近いと思われるが)、その TGCI をも批判している。

- (1) a. I haven’t had breakfast {today}.
- b. John and Mary are married {to each other}.
- c. Robin ate the shrimp and { as a result} got food poisoning.

Levinson (2000)によれば、{ } の部分は彼の I 原理、簡略的にいえば「会話の情報内容を拡張せよ」によって導き出されるとする。Horn は「このような拡張部分は真理条件に影響する以上、Grice 流の推意ではあり得ないし、取り消し可能であるから、what is said の一

部でもない」(p.23) と言う。結局、彼は「話し手の伝達しようとした意味 (speaker meaning) のいくつかの側面は what is implicated でも what is said でもない」という Kent Bach (1994, 2001) の主張に同調し、拡張部分を「ふさわしい用語があらわれるまで implicature と考えよう」(p.24) と提案している。

意味論、語用論の境界をめぐる議論は、このように混沌としているが、結局、「推論」というものをどのように捉えるか、あるいは人間が行っている推論機構とは本当はどういうものなのか、という問題に帰着するように思われる。ある命題 A を前提に、reasoning を経て命題 A' に推移するという知的処理を狭い意味の推論とすれば、それ以外に、広い意味の推論、すなわち到達しようとする判断が、先行する判断からくる、あるいは基づくということに気付いていなければならないという制約をはずした、無意識下での、知覚に近い「直感」のようなものも推論に含めて考えることもできるのかもしれない (Recanati 2002, 2004)。本書では、この問題に最終結論は与えられていない。しかしこれに関連し、Jaszczolt は本書掲載の論文⑱や、最近の著書 (Jaszczolt 2005) で、「デフォルト意味論」(Default Semantics) という立場を提案している。そこでは発話の論理表示 (logical form) と発話の意味との間に中間の意味表示のレベルを認めず、すべての情報が対等な資格で全体の意味の合成に関わり、意味表示が作られるという融合表示 (merger representation) の存在が主張されている (p.475)。これによれば、完全に特定化されていない意味表示 (underspecified meaning) が、推論により完全な命題表示になると考えるのではなく、融合表示において文法、心的志向性 (intentionality) など発話に関わる全情報が合成され意味解釈が行われると仮定されている。次の例をみてみよう。

(2) The youngest contestant won the piano competition.

a. Jimmy Brown won the piano competition.

b. The youngest contestant, whoever he or she was, won the piano competition.

(2) の定名詞句に関して、指示的読み (2a) と、属性的読み (2b) に曖昧であると考えられる。この点で (2) には意味の不完全性があると思われる。しかし、Jaszczolt は意味理解には (そうであると解釈された) 話者の心的志向性も関わるのであり、定名詞句の場合、志向性が強いと (2a) の指示的読み、弱いと (2b) の属性読みになると理解されるとし、デフォルトでは志向性は強いと捉えられるので、融合表示では (それに反する情報が与えられない場合) (2a) の解釈のみが合成されるという (p.476)。この「志向性」は Searle (1983) に基づくもので、興味ある提案になっている。しかし、「志向性」の心的実在が証明されるのでない限り、一般にデフォルト的解釈を与えられる読みを「それは志向性が関与している」というのでは循環論の誤謬に陥っているといわねばならない。デフォルト意味論については

今後の理論的發展を注意して見守りたい。

### 3. 2. 意味表示の不完全性 (underspecification) について

本書では、一般に意味の不完全性の例として説明される現象以外にも様々な事象がとりあげられていて興味深い。例えば、Gutierrez-Rexach の論文⑪では最上級を持つ曖昧性をとりあげている。

(3) John went to the mall. He bought his wife the most expensive present. (p.242)

(3) で、最上級を持つ第2の文は4通りに解釈可能であるという。ここで he と his wife とに焦点をあてた解釈 (他の誰でもなく John が最も高価なプレゼントを買った、他の誰でもなく his wife に John は最も高価なプレゼントを買った) 以外の二つの読みを考えると、

(i) この世で一番高価なプレゼントを買った (絶対読み)

(ii) 今までで一番高価なプレゼントを買った (相対読み)

の二つの解釈が得られる。この解釈可能性は、「(3) 文の発話直前の文脈 K に第一文を加えた文脈集合 C の中において、他のどのプレゼント y も x より高価なものはない、そのような x を John は妻に買った」という表示が DRS によって与えられるとする。(i) (ii) の解釈の違いは文脈での対象 y の捉え方に起因すると思われる。DRT の持つ形式的明示性の有用性に気付かされる議論である。

Ronnie Cann の論文⑬では、連結詞 (copula) の be 動詞が虚辞として扱われ、タイプ  $\langle e \rightarrow t \rangle$  のメタ変数と規定されている (つまり連結詞 be を predicate proform と分析する)。連結詞の be は(a)叙述的 be、(b)等式的 be、(c) 特定化 be、などに分類されるが Cann によれば underspecified な内容の連結詞 be を持つ文が (be の) 出現環境、発話文脈によって意味論的、語用論的に解釈を与えられるとする (p.319)。考え方の大筋を、技術的側面には入らず、簡略的にみておこう。下の (4) は A,B の会話、(5) は解釈に関連する要素である。

(4) A: Oh no, someone has drunk the last of the milk again.

B: John is the culprit.

(5) a. 文脈情報:  $\exists x \text{Drink}(m)(x)$  [残っていたミルクを飲んだ者がいる]

b. a を満たす任意項:  $\langle e, x, \text{Drink}(m)(x) \rangle$

c. 想定:  $\text{Drink}(m)(\alpha) \vdash \text{Wrongdoer}(\alpha)$

d. culprit の意味:  $\text{Culprit}(\alpha) \vdash \text{Wrongdoer}(\alpha)$

“the culprit”の指示的意味として、その指示対象は描写にあてはまるものでなければならな

い。ここで文脈から「残っていたミルクを飲んでしまった者」の存在が得られ (⇒ 5a)、語用論的想定 (5c) により、「最後に残ったミルクを飲む⇒悪い行い」という解釈が生まれ、さらに *culprit* の意味から「容疑者である者は悪い行いをした者」という解釈が生まれる。その結果、この文脈では容疑者とは最後のミルクを飲んだ者と理解される。またメタ述語にも「ミルクを飲んだ者」という解釈が与えられる。最終的に「ジョンはミルクを飲んだものであり、容疑者とはミルクを飲んだ者である」ことが得られ、これを介して B の発話文内の *be* は、その前後の指示対象が同一であることを示す等式的 *be* (*equative be*) と理解されるとする。

次に、⑩の Luis Paris の論文ではスペイン語の移動の様態が、英語とは違い意味的に明示されているのではなく、推意として伝えられることが述べられている (p.421)。次の例をみられたい。

- (6) a. El niño entró a su habitación.  
(the child entered to his bedroom)  
b. The child walked into his room.

(6b) のように、英語では「歩いて部屋に入った」の「歩いて」の部分は意味の一部として示されているのに対して、スペイン語では (6a) のように「に入った」だけが意味的に示され、その点で移動動詞を含む文は不完全であるとする。「歩いて」という様態は Levinson の I 原理で推論される (これを *Means Expenditure* という)。

#### 4. 最後に

「意味論と語用論の境界の問題」に関する文献は近年、多数出版されている。本書は其中でも多様な話題を取り扱っており、注目に値する。本書では、意味論の視点を一般に語用論的とみなされる現象に投射した技術的、形式的論調の議論がやや多いように思われるが、この分野での今後の展開を予期させるもの多く極めて興味深い内容を持つ。

#### 参考文献

- Bach, K. 1994. "Conversational Implicature." *Mind and Language* 9, 124-162.  
Bach, K. 2001. "You Don't Say?" *Synthese* 127, 15-44.  
Carston, R. 2002. *Thoughts and Utterances: The Pragmatics of Explicit Communication*. Oxford: Blackwell.  
Jaszczolt, K.M. 2005. *Default Semantics: Foundations of a Compositional Theory of Acts of Communication*. Oxford: Oxford University Press.  
Levinson, S.C. 2000. *Presumptive Meanings: The Theory of Generalized Conversational Implicature*.

Cambridge, Mass: MIT Press.

Recanati, F. 2002. "Does Linguistic Communication Rest on Inference?" *Mind and Language* 17, 105-26.

Recanati, F. 2004. *Literal Meaning*. Cambridge: Cambridge University Press.

Searle, J.R. 1983. *Intentionality: An Essay in the Philosophy of Mind*. Cambridge: Cambridge University Press.

Sperber, D. and D.Wilson. 1995. *Relevance: Communication and Cognition*. (2nd Edition) Oxford: Blackwell.